Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞ギャップを越えて ： 『現象学の自然化ー現代の現象学と認知科学における諸論点』を読む
Author(s)	紀平, 知樹
Citation	メタフュシカ. 2000, 31, p. 151-157
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66639
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

《書　評》

ギャップを越えて

――『現象学の自然化――現代の現象学と認知科学における諸論点』を読む――

Jean Petitot, Francisco J. Varela, Bernard Pachoud, Jean-Michel Roy (ed.)
Naturalizing Phenomenology
Issues in contemporary Phenomenology and Cognitive Science
Stanford University press, 1999

紀　平　知　樹

（一）Phenomenologyからphenomenologyへ

哲学史の一般的な常識からいうならば、これまで単に現象学とのみいえば、フッサールに端を発する一連の学説のことを指すものであった。もちろんフッサールの現象学以外にも現象学という名称を使っている哲学者たちがいたことも明らかである。例えばヘーゲルの精神現象学、マッハの物理学的現象学、パースの現象学などが存在していた。また、フッサールが現象学という名称を採用した当時、ドイツの哲学界において現象学という名称は特殊なものではなく、一般名詞として通用していた、ということが谷徹氏の綿密な調査によって明らかにされている。(1)

しかし現在米国で盛んに議論されている心の哲学における文献において現象学という言葉が頻繁に用いられており、しかもそれはもはやフッサールの現象学を指すのではないような形で用いられている。つまりそのような場合、現象学は大文字のPから始まるのではなく、小文字のpによって始まるのである。この変化は、現象学が一度は固有の学説を示すものとして用いられていたが、いまや再び一般名詞として用いられ始めた、ということを意味しているのであろう。

しかしこのように現象学が一般名詞として使用されるということの意味はフッサール現象学にとっては深刻なものとなるであろう。なぜなら、現象学が一般名詞として用いられるということの裏には、現象学がある種特権的な学問ではなく、むしろ他の諸学科と並ぶ一つの学問として性格付けられているということを含意しているからである。

周知の通りフッサールは現象学を単に他の諸学問と並ぶ一学問として打ち立てようとしていたのではない。即ちフッサール

は現象学をあらゆる学問一般の学問として、そしてまた第一哲学として建設しようとしていたのである。従ってフッサールにとって、現象学が一般名詞として用いられるという事態は許しがたいことかもしれない。

この原因はいったいどこにあるのであろうか。フッサール現象学の限界は以前から指摘され続けている。例えば、フッサール現象学固有の方法である現象学的還元につきまとう限界の問題、またフッサールがあらゆる原理の中の原理として持ち出した原的に与える直観に対する批判、またこれらのことに関連する基礎づけ主義の破産などである。

しかしまた逆にいうならば、現象学が一般名詞として用いられるということは、フッサール現象学ではないにしろ、何らかの現象学が要請されているということの証でもあるだろう。例えばダニエル・デネットはヘテロ現象学を、またトーマス・ネーゲルは客観的現象学の必要性を主張している。この*Naturalizing Phenomenology*という論文集もまたこのような流れの中に位置づけられることができるであろう。すなわち現在さかんに研究が進んでいる認知科学ではあるが、それには一つの重大な欠陥が以前から指摘されており、現象学こそがその欠陥を補足することができるのであって、本書の著者達は、そのためにフッサール現象学を自然化するというプロジェクトに着手しているのである。H・ドレイファスらの編集によって、すでに一九八二年に*Husserl Intentionality and Cognitive Science*が出版され、同様の試みが示されている。この論文集はそれ以降のフッサール研究の一つの流れを作り出した。つまり現象学と分析哲学との対話、あるいはもう少し限定するならばフッサールとフレーゲの関係に関する研究を促進させ、この論文集に収録されている諸論文は多くの論文で引用されている。しかし、この本の重点はいまだフッサール解釈におかれていたという感は否めないであろう。実際この論文集の多くは、「歴史的背景」と題された第一部と第二部の「基本的概念と理論」におかれている。それに対して本書*Naturalizing Phenomenology*は、もちろんフッサール現象学の解釈という意味合いがないわけではないが、それよりもむしろ実際にフッサール現象学を自然化するという野心的な試みに取りかかっているということがいえるであろう。

(二) ギャップを越えて

それではなぜ現象学が必要なのであろうか。認知科学の抱えるアポリアについての指摘を行っているうちで、おそらく最も有名なのは、「コウモリであるとはどのようなことか?」というタイトルが付けられたネーゲルの論文であろう。この論文においてネーゲルは認知科学には一人称的視点が欠けているとい

うことを指摘したのである。例えばコウモリであることがどのようなことかを調べるために、コウモリの神経生理学的な機構を解明したとしても、それはコウモリであることがどのようなものであるか、ということを解明したことにはならないのである。また私がコウモリになったと想像してみて、自分が天井から逆さまにぶら下がっているようなことを考えたとしても、なるほどそのことによって、私がコウモリであるならそれはどのようなことかは明らかになるかもしれない、しかしやはりそれはコウモリであることがどのようなことかを明らかにしているわけではないのである。この指摘は、認知心理学が現象学的与件を取り逃がしているということを意味しているのであるが、この場合現象学的与件という語は、単に経験の主観的内容を意味している。

フッサール現象学を自然化するという試みは、この認知科学に含まれるアポリアを解決する試みであるということもいえるであろう。しかしそのためには数々の困難が、待ち受けているということも明らかである。

フッサールが自然科学の批判をおこなっていたことはいうまでもないことであるが、以下その批判の要点をまとめてみよう。

(1) 自然科学は対象の存在を素朴に前提する独断的態度において営まれる学問である。

(2) 心的現象と物理的現象の区別があり、心的現象は、物理的現象に還元されるものではない。

(3) 自然科学が扱う物理的現象の根本法則は因果性であるが、現象学が扱う純粋意識における根本法則は、動機付け連関である。

(4) 自然科学、特にその主要な道具となっている数学は形式的本質を扱う学問であり、それはまた精密な本質で、数学化可能である。それに対して現象学が扱う本質は形態学的本質であって、それは不精密であり、数学化不可能である。したがって現象学は体験の幾何学ではない。

(5) 数学の形式化が自然科学の発展に大きく寄与していることは確かであるが、しかしそれによってまた自然科学の意味の空洞化が生じ、そのことこそが学問の危機である。

もしもフッサール現象学を自然化しようとするならば、フッサールによるこれらの批判に十分な反論を与えなければならないだろう。しかしここで付け加えておかなければならないことは、フッサールは何も自然科学が不要であるといっているわけではなく、むしろ彼自身、自然科学の発展ということは十分認めているのである。そして自然科学の空洞を埋めることを、あるいは自然科学に確固たる基盤を与えることがみずからの使命

であると考えていたといってもよいであろう。以下では「ギャップを越えて」と題された編者たちの序論によって、フッサールの主張に対してどのような弁明をおこなっているかをみておくことにしよう。

まずは自然化ということであるが、これは「あらゆる受け入れうる特性が自然科学によって認められた特性と連続的になるように、説明の枠組みを統合する」(p.2) ことを意味している。この自然化という試みにとっての鍵は、数学化ということである。自然科学の主要な道具が数学であるならば、それとの連続性を得るためには、現象学の数学化ということが必要になるのである。しかし明らかにフッサールは現象学を数学化することには反対であろうし、またそもそも現象学が扱うテーマは数学化不可能なものであると考えている。

編者たちによれば、このようなフッサールの見解は、彼の時代の制約から来る偶然的な制約であって、彼の反自然主義は、学問の基礎づけということにとってもはや適切ではないと考えている。しかしこの自然化の試みにはあるパラドックスが潜んでいる。まず一方で、この研究は記述的であるばかりでなく、また説明的でもあり、下位段階の説明にもとづいて、しかも特に神経生理学的レベルの説明の数学的モデルによって、現象学的与件の存在と本性を説明するという意味で自然主義的である。他方フッサール現象学は、自然主義的説明の対極に位置するものである。このパラドックスをいかに回避することができるか、ということが本書の成否にとって重大な意味を持つことは明らかであろう。

この際に重要なことは、フッサールは現象学が扱う対象領域と自然科学が扱う対象領域とが異なる領域であると考えていたことであろう。心的現象と物理的現象の区別はフッサールが、ブレンターノから受け継いだものであろうが、しかしディルタイやJ・S・ミルも同様の区別をおこなっていたといってもよいであろう。すなわちディルタイであれば、自然科学に対する精神科学、ミルにおいては道徳科学といったものがそれである。フッサールもまたこのような流れの中に属しており、自然科学に対して、心的なものを扱う学問の独自性を主張していたのである。自然化という作業を遂行するためには、このような区分を見直さなければならない。特にこれらの存在論的カテゴリーの見直しが必要であろう。

編者たちによれば、再カテゴリー化は、情報処理過程と複雑系の自己組織化理論とによっておこなわれうるという。そして自然化の過程は次のようなステップを踏むことになる (cf. p. 48)。

(1) 現象学的与件→フッサール的記述→
(2) 数学化→アルゴリズム→
(3) 自然主義的説明

この作業の実際に関しては、本書に収録されている諸論文をあたってもらう事にして、以下ではこの現象学を自然化するという試みに関して私なりの評価を述べたいと思う。

(三) 純粋現象学の形式性

先にも述べたが、フッサールは現象学をあらゆる学問に対して土台を提供するようなものとして構想していたのであった。そこから、学問が意識活動の所産であるならば、必然的に現象学の主題として意識を、あるいは意識の対象に意味付与を行い、それによって対象の存在を確保する超越論的主観性を取り上げねばならないのである。特にフッサールはこの超越論的主観性の本質構造を問題としているのである。すなわち現象学は「超越論的主観性の不壊の本質構造をそのアプリオリとして取り出す」(V, 142) のであると「『イデーンⅠ』への後書き」において述べている。また現象学が他の一切の学問にその基盤を提供するのであるとするならば、現象学と他の諸学問の間に橋渡しのできない溝があってはならない。そのような意味で現象学は自然科学とも何らかの連続性を保たねばならないことになるであろう。従って、現象学的な特性と自然科学によって認められた特性との間に連続性をつけるように説明の枠組みを統合するという本書の試みは、それほど荒唐無稽の試みではないのではないだろうか。

しかし一つ難点があるとするならば、フッサールの記述を数学化し、それをアルゴリズムによって提示するという試みであろう。フッサールが現象学を体験の幾何学として性格づけていないことは明らかであるし、現象学と数学の領域の相違というものも存在する。現象学は実質的学問であり、他方で数学は形式的学問である。しかしここでわれわれが注意しなければならないのは、通常『イデーンⅠ』といわれる彼の主著が『純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想』というタイトルが付けられていることである。すなわち一方に純粋現象学というものがあり、他方で現象学的哲学というものがある。フッサールは『イデーンⅠ』において、さらにその後公刊された著作においても、もっぱら前者の純粋現象学の範囲内を動いていたといってもよいであろう。そこでは先にも述べたように超越論的主観性の本質「構造」を問題としているのである。このことからいえるのは、フッサールは、超越論的主観性の能作をいったんモデル化しようと試みていたのではないかということである。

この超越論的主観性のモデル化ということにとっての鍵概念は、彼が数学の問題に関して用いている確定的多様体という概念である。その概念をフッサールは次のように定義している。まず多様体ということに関して、それは形式の面でのみ規定された可能的理論の対象的相関者であり、また「そのような形式

の理論によって支配される、可能な認識領域一般」のことであるという。また確定的とは、その領域がことごとく遺漏なく定義されている、ということを意味している。したがってまず多様という語は、単に種種雑多な、とか何の法則もないし、ということを意味しているのではない。むしろある法則によってしっかりと支配されていることを意味しているのである。もちろんフッサールは純粋意識の領域を数学的に定義できる領域とは考えていない。しかしフッサールはそれでもなお経験の無限の多様性や現出の無限の多様ということを語るのである。これは単なる偶然なのであろうか。例えばフッサールが現出が無限に多様であるというとき、それは何を意味しているのであろう。

ある対象の現出様式は、その対象の本質によって決定されているのであり、物理学的事物には、物理学的事物の現出様式がある。従ってその現出は気ままに現出するのではなく、むしろその本質法則に基づいて現出するのである。経験の無限の多様に関しても同様であり、経験には経験を貫く本質法則があるのであって、それが経験と呼ばれる以上はその法則によって支配されていなければならないのであり、その法則がない場合には、それはもはや経験とは呼ばれえないであろう。経験の本質法則とは、例えば志向性であり、動機づけであり、連合である。フッサールはそれを次のように定義する。志向性とは「あるものについての意識」であり、連合とは「あるものがあるものを思い出させる」ということである。このとき、あるものが何であるかはまずはどうでもよいことであって、そこでは意識の形式的な機能が提示されているのである。

このように考えるなら、フッサールが純粋意識の領域に多様性という語を用いることも納得がいくであろう。すなわち純粋意識はその本質法則によって支配される領域なのである。純粋現象学という名のものとでフッサールはそれを追求していたと考えられるのであり、それこそが超越論的主観性の本質構造なのであって、世界のあらゆるものがその上に現れ、意味付与されて構造化されるのである。このような見解に認知科学における計算主義との共通点を見ることは容易であろう。従ってフッサールの記述を数学化して、アルゴリズムとして提示するという試みもフッサールの目論見を継続することであるといえるかもしれない。[2]

（四）本書の構成

本書は三部構成になっており、第一部は、「志向性、運動、時間性」というタイトルのもと、D・スミスの「自然化された志向性?」やマトゥラーナとの共著『オートポエーシス』で知られているF・ヴァレラの「見せかけの現在。時間意識の神経現象学」といった論文が収められている。第二部は、「現象学

における数学」というタイトルのもとで、B・スミスが「真理と視覚的領野」という論文でJ・J・ギブソンの生態的心理学とフッサールの知覚論を比較検討している。またJ・プティトーは「知覚の現象学にとっての形態学的形相」という論文において形態学的本質を数学化することに努めている。またD・フェレスダールは、指摘されてはいたが、これまだまだほとんど手のつけられていなかった、ゲーデルとフッサールの関係を論じている。現象学を自然化するというプロジェクトにとって、この第二部は非常に重要な意味を持っている。そして第三部は「自然化の本性と限界」と題され、R・マッキンタイアーがドレッキのクオリア概念の検討を行っている。またR・バルバラスは「知覚的志向性の根源的な基盤としての生物の運動」において、メルロ=ポンティのアイデアを継承しつつ自然化の作業に取り組んでいる。

以上ごく大雑把に現象学を自然化するという試みをみてきたわけであるが、本書はフッサール現象学に新たな可能性をひらく野心的な試みであるといえよう。

注

(1) 谷徹『意識の自然　現象学の可能性を拓く』勁草書房、一九九八年、二二頁以下を参照

(2) 認知科学と現象学の関係についてより詳しくは以下の論文を参照のこと。野家伸也「認知論的転回――認知科学における現象学的思惟――」『思想』第九一六号、二〇〇〇年一〇月

（きひらともき　大谷大学文学部特別研修員）